



2022 年度日本語教育学会支部集会予稿集

【北海道支部】 2022（令和 4）年 7 月 9 日／北海道大学

2022 年度第 2 回支部集会【北海道支部】

主催：公益社団法人 日本語教育学会

共催：北海道大学 高等教育推進機構国際教育研究部，北海道日本語教育ネットワーク

日時：2022 年 7 月 9 日（土） 13:25-16:35（受付開始 13:00）

会場：北海道大学 学生交流ステーション 2 階（〒060-0815 札幌市北区北 15 条西 8 丁目）

交通アクセス：<https://www.hokudai.ac.jp/introduction/campus/campusmap/>

※JR 札幌駅北口より徒歩 20 分，地下鉄南北線「北 12 条駅」より徒歩 10 分

参加費：500 円（マイページより事前参加登録時に支払い） 定員：70 名

申込方法：おおよその人数把握と受付での混雑回避のため，ご参加予定の方は，[学会ウェブサイト](#)のマイページから 7 月 6 日（水）までに事前参加登録をお願いいたします。事前参加登録について詳しくは，[こちら](#)をご覧ください。会場に余裕があれば当日参加も可能です。

問合せ先：公益社団法人日本語教育学会 支部活動委員会

E-mail: shibu@nkg.or.jp TEL: 03-3262-4291（平日 9～18 時のみ）

◆支部集会日程◆

2022 年 7 月 9 日（土） 会場：講義室 207・208・大講義室 209	
13:00	受付開始（大講義室 209）
13:25-13:30	開会挨拶（大講義室 209）
13:30-15:00	ポスター発表・交流ひろば（講義室 207・208・大講義室 209）
15:30-16:30	ビブリオバトル「日本語教育にかかわる人におすすめの本」（大講義室 209）
16:30-16:35	閉会挨拶（大講義室 209）

閉会挨拶

【13:25-13:30／大講義室 209】

ポスター発表

【13:30-15:00】

※本発表は査読審査を経た学会発表です。発表要旨は本プログラム p.3～，詳細は予稿集原稿をご覧ください。

- ① 大学生による〈やさしい日本語〉コンテンツ作成の試み 【講義室 207】
丸島歩（北海学園大学）……………p.3
- ② 事態把握の明示的指導の効果—学習者の気付きについて— 【講義室 208】
鄭在喜（早稲田大学）……………p.8

交流ひろば

【13:30-15:00／大講義室 209】

※「交流ひろば」は、日本語教育とその関連領域の話題についての参加者相互の情報共有および同じ興味や問題意識を持つ者同士のネットワーク作りを目的としています。審査を経た学会発表ではありません。「交流ひろば」への出展は、学会員・非会員に限らずどなたでも可能です。

① 支援者への支援を目的とした、介護の日本語学習支援ブログサイトの開発例

中川健司(横浜国立大学)

外国人介護従事者への学習支援を行う支援者への支援を目的として、「介護の日本語 学習支援ブログ」サイトを開発しました。当日は、どのような内容の記事があれば支援者にとって有益か意見交換を行いたいと思っています。興味のある方はぜひお越しください。

② 反転授業による留学生対象オンラインビジネス日本語講座の実践報告

鈴木綾乃(横浜国立大学), 浦由実(フリーランス), 中川健司(横浜国立大学)

出展者らは「ヨコハマ・カナガワ留学生就職促進プログラム」の一環として、2021年6月および2022年2月にオンラインでビジネス日本語講座を行いました。この講座は、事前に出展者らが作成した動画を視聴し、その内容に基づいてディスカッションや応用タスクを行う反転授業の形式でした。本出展では、この実践例について報告し、留学生対象ビジネス日本語教育の効果的な方法について意見交換を行いたいと考えています。

ビブリオバトル「日本語教育にかかわる人におすすめの本」

【15:30-16:30／大講義室 209】

ビブリオバトルは、本を5分で紹介するスピーチを聞いて、読みたくなった本に投票して「チャンプ本」を選ぶ「書評ゲーム」です。「日本語教育にかかわる人、興味がある人にぜひ読んでほしい！」という本をプレゼンターのみなさんが紹介します。新たな本との出会いもあれば、既読の本にも違う魅力を見いだして、また読みたくなるかもしれません。ぜひ、あなたの「読みたい本」に一票を！

[* プレゼンターを募集しています。別紙ポスターの案内をご覧ください\(6月24日締切\)。](#)

閉会挨拶

【16:30-16:35／大講義室 209】

◆コロナ感染対策について◆ ご来場の際は、必ずマスク着用をお願いします。また、当日37℃以上の発熱がある方、風邪の症状や強いだるさ、息苦しさがある方、身近に新型コロナウイルス感染症の患者や濃厚接触者がいる方、政府が入国制限措置を設けている国・地域から日本へ入国後、14日間経過していない方、その他、体調に不安がある方のご参加はご遠慮ください。

大学生による〈やさしい日本語〉コンテンツ作成の試み

丸島歩（北海学園大学）

1. はじめに

2021年度の1年間をかけて、北海道内の私立大学の人文学系の学科の3年生を対象とした演習の授業で、〈やさしい日本語〉を用いたコンテンツを作成する活動を行った。日本語教育系のゼミであるものの、受講生は日本語に幅広い興味を持つ学生が多い。卒業後には中学・高校の国語教員、公務員、民間企業など、多様な進路を志望しており、日本語教師など日本語教育に関わる職業を志望するものはほとんどいない。しかし、北海道にも今後外国人居住者が増えることが予想されることから、これからの社会のさまざまな場において、多様な人々の橋渡しになることができる人材の養成が必要であると考え、〈やさしい日本語〉を身につけてもらうために、〈やさしい日本語〉を用いて情報発信をする活動を行うこととした。

〈やさしい日本語〉は災害情報や生活情報の発信に用いられることが多い。大学が所在している地域の周辺は行政の文書等もある程度〈やさしい日本語〉化がなされていること、幅広いことがらについて、自ら伝えたいことが表現できるようになることも重要だと考えたことから、コンテンツのテーマは自由とした。演習は昼間部学生向けと夜間部学生向けのクラスがあったがこの2クラスを合わせて19名で、全員が日本語母語話者である。

本発表では、演習授業の流れを概観したのち、後期の学期末に受講生が書いた感想文を分析することで、〈やさしい日本語〉が受講生たちにどのような学びをもたらしたかについて考察したい。

2. 演習授業の概要

前期のはじめの数回は〈やさしい日本語〉の基本的な理念や語彙、表記、構文などについて学んだ。その後各自のテーマを決め、それぞれのテーマに合うプラットフォームを検討したうえで、個人もしくはグループでコンテンツ作成を進めた。前期のスケジュールの抜粋を以下の表1に示す。なお、後期は第10回までをコンテンツ作成とそのまとめに用いた。

表1 前期のスケジュール（抜粋）

回	日	内容	詳細
1	4/13	ガイダンス	この授業の進め方
2	4/20	「やさしい日本語」の概要	「やさしい日本語」の成立と考え方

3	4/27	日本語の構文・文法と〈やさしい日本語〉	書き換え実践
4	5/11	日本語の語彙・表記と〈やさしい日本語〉	
5	5/18	〈やさしい日本語〉の活用方法を考える	QTF（質問づくり）のテクニックを用いる
6	5/25	適切なプラットフォームを考える	コンテンツを考えながら、それにふさわしい（＋実現可能な）プラットフォームを考える。単独で行うか、チームで進めるか
7	6/1	コンテンツの内容について考える	
8	6/8	〈やさしい日本語〉コンテンツの作成 A①（草稿）	コンテンツ作成。教員は適宜アドバイスをする。 授業の最後には、全員に向けて自分（のグループ）の進捗を報告する。
9	6/15	〈やさしい日本語〉コンテンツの作成 A②（修正）	
10	6/22	〈やさしい日本語〉コンテンツの作成 A③（完成）	
11	6/29	〈やさしい日本語〉コンテンツの作成 B①（草稿）	
12	7/6	〈やさしい日本語〉コンテンツの作成 B②（修正）	
13	7/13	〈やさしい日本語〉コンテンツの作成 B③（完成）	
14	7/20	コンテンツの統合、最終確認	
15	7/27	前期のまとめ	まとめ、後期の予告

前期の間は北海道内等の観光地に関するテーマが多かった。読み手として日本に興味のある外国人が想定しやすかったためと思われる。後期は日本文学の紹介や要約に取り組む個人やグループが増えた。2020 年度より道内の文学館の協力を得ており、教員による示唆もあったためと思われる。また、前期の取り組みを通して〈やさしい日本語〉で書くことに慣れたことで、幅広い内容に挑戦しようとする意識に繋がった可能性もある。

以下の表 2 に、作成コンテンツの一覧を示す。

表 2 作成コンテンツ一覧

	昼／夜	学期	テーマ	人数	媒体
1	昼	前期	北海道の観光地	3	Web サイト
2	昼	前期	日本の観光地	1	Web サイト
3	昼	前期	道の駅	1	Web サイト
4	昼	前期	北海道のグルメ	2	Web サイト
5	昼	後期	スタジオジブリ作品紹介	1	Web サイト
6	昼	後期	小林多喜二『蟹工船』要約	2	pdf ファイル
7	昼	後期	三浦綾子の紹介	3	Blog（note）
8	昼	後期	西條奈加の紹介	1	pdf ファイル
9	昼	後期	茨木のり子	1	Blog（note）

10	昼	通年	北海道の伝統文化	2	Twitter
11	昼	通年	住民票請求	1	Web サイト
12	昼	通年	助成金申請	1	Web サイト
13	夜	前期	北海道の観光地	4	Web サイト
14	夜	後期	警報・注意報	1	pdf ファイル
15	夜	後期	石川啄木の短歌	1	Blog (note)
16	夜	後期	日本の家庭料理	1	Instagram
17	夜	後期	テーマパーク	1	Web サイト

コンテンツ発信の媒体は、Web サイト、Blog、SNS などそれぞれに合うプラットフォームを各々で選択した。コンテンツの作成・公開も、部分的に教員が取りまとめや協力をしたものもあったが、基本的には受講生自らが行った。教員による添削を含めた作業工程は、コミュニケーションアプリの Discord で共有した。これにより、コロナウイルス感染症の影響で対面での演習が行えない間も、滞ることなく進捗の共有を行うことができた。

3. 振り返り感想文の分析

3-1. 分析対象と方法

後期の学期末に1年間の振り返りのために、活動の感想を400字程度で書いてもらった。受講生が〈やさしい日本語〉でのコンテンツ作成を通して何を学んだのかを明らかにするために、この感想文を111センテンスに分割し、佐藤（2008）を参考にオープン・コーディングの手法を用いて質的な分析を行った。

3-2. 結果

概念カテゴリーとしては、「他者の立場」「〈やさしい日本語〉化」「〈やさしい日本語〉の意義」「ことばに対する学び」などが抽出された。概念化カテゴリー別のセンテンス数、学生数は以下の図1に示す。「〈やさしい日本語〉化」、「〈やさしい日本語〉の意義」、「他者の立場」については過半数の学生が触れており、特に「他者の立場」については1人あたりのセンテンス数が約2.6文と最も多い。「他者の立場」について言及した受講生は、ほかのカテゴリーよりも字数を割く傾向にあったと言えるだろう。

センテンス数と学生数

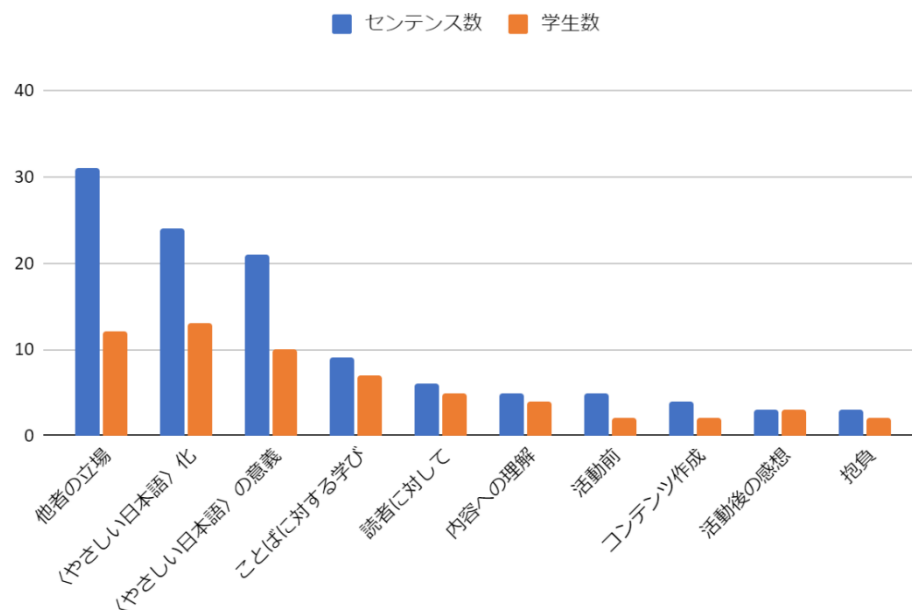


図1 センテンス数、学生数（概念化カテゴリー別）

以下では、主要な概念化カテゴリーの詳細について見てゆきたい。

「<やさしい日本語> の意義」には「<やさしい日本語> の意義」「多くの人が<やさしい日本語>を知るべき、使うべき」などの焦点的コーディングが含まれていた。「<やさしい日本語> 化」には、「<やさしい日本語> で書くことの難しさ」「<やさしい日本語> 化での知識・技術」などの焦点的コーディングが含まれる。「<やさしい日本語> の意義」については、「<やさしい日本語> の成立や展開とともに授業の初期で前提知識として扱い、「<やさしい日本語> 化」における文章作成の技術や工夫については1年間を通して学生たちが向き合ってきた。それゆえ、振り返りの中に多く現れるのは自然なことであると言える。

しかし、「他者の立場」に立つことの重要性はあまり明示的に示して来なかった。「他者の立場」のカテゴリーの中には「ふだんの日本語は非母語話者には難しい」「非母語話者の気持ちや立場を想像」のような焦点化コーディングが付されたものが多いことから、非母語話者を意識した記述が多いことがわかる。「自分にとってはやさしくても他人にはやさしくない」「誰にでもわかるように」などの焦点化コードもあり、日常的に用いていることばを逸脱することで、自分とは異なる環境や背景をもつ人の立場を考えるに至っていることがうかがえる。さらに、ことばを越えて他者の立場を想像したことに言及する記述も見られた。このことから、「多様な人々の橋渡しになることができる人材の養成」という当初の目的はある程度達成できたと言える。

「ことばに対する学び」については、「日本語そのものへの気づき」「自らの言語能力向

上に繋がる」のような焦点化コードが含まれていた。やさしく書くことを通して、簡潔にわかりやすく伝えること、文の構造を意識すること、新たな語彙との出会いに繋がったことがうかがえる記述が見られた。この点においても、教員が意図しなかった学びが起きていたことが明らかになった。

4. まとめと展望

大学生による〈やさしい日本語〉実践に関する報告は伊藤ほか（2020）、森（2020）などこれまでにもあるが、自由度の高いコンテンツ作成を行ったものや、学生の振り返りからその学びを分析したものは管見の限り見られない。本研究の結果は〈やさしい日本語〉の実践が大学生にとって、日本語教育のみならず、幅広い学びに繋がることを示すものであると考える。

参考文献

- 佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法－原理・方法・実践－』新曜社。
- 伊藤（横山）美紀・高橋圭介・伊藤恵・相川健太・奥野拓（2020）「「やさしい日本語」の活用による「観光」と「学校」への貢献の可能性」『国際地域研究』2, 122-135.
- 森朋子（2020）「「やさしい日本語」による留学生のための防災案内の作成－多文化共生社会に多文化共生社会に必要な言語コミュニケーション能力を養成するプロジェクト－」『東京家政学院大学紀要』60, 185-193.

謝辞

演習授業で日本文学に関するコンテンツ作成を行うにあたり、新島短期大学の三成清香先生にアドバイスを頂いた。また、テーマ設定や成果物の公開に関して、市立小樽文学館や同美術館の方々、特に美術館の学芸員である山田菜月氏にご協力を頂いた。この場を借りて御礼を申し上げたい。また、感想文の研究利用を承諾してくれた演習の受講生たちにも感謝を述べたい。

事態把握の明示的指導の効果

—学習者の気付きについて—

鄭 在喜（早稲田大学）

1. はじめに

本発表は、事態把握（construal）という認知言語学の概念を用い、日本語母語話者（以下、日本語話者）の事態の捉え方を明示的に指導した場合の学習効果についてまとめたものである。

本発表における明示的指導とは、日本語話者が好む物事を主観的に捉える傾向を明示して指導を行うということである。例えば、母が許可もなく自分の日記を読んだ出来事に対して、日本語話者は「母が私の日記を読んだ」ではなく、「（私は）母に日記を読まれた」のほうを自然に感じるが、それは誰かが自分の日記を読んだ状況を自分との関わりをもたせて表出するという主観的把握を好んでいるため、それが受動という形で言語化されている（池上 2006）というふうに、文法的な知識（例：主語や助詞が変わる等）から離れ、その状況の人物に注目する、とりわけ人物の感情に注目することを強調しながら指導した。

調査は、発表者が所属校で担当している留学生対象日本語科目の履修者を対象に行った。当科目は初中級レベルを対象にした日本語文法における視点を見直すもので、「授受表現・ヴォイス（受動／使役／使役受動）・ナル表現・日本語話者の「見え」：主語「私」の使用について」の4つの項目を扱っている。そして該当文型の授業が終わったら、その文型を用いた漫画を見てそのストーリーをまとめるミニ作文を提出する。ミニ作文は計4回行っているが、1回目のミニ作文はレベルチェックを兼ねて実施するもので、休憩室で社員3名が行う会話が描かれた漫画を見てそのストーリーをまとめるものである。そして2回目は授受表現、3回目は受動表現、4回目のミニ作文はナル表現の産出を促す漫画になっている。履修者は課題としてこれらのミニ作文を提出し、次の授業でグループに分け、作文を発表し合いながら、同じ漫画を見て作文をしても使っている文法や表現がそれぞれ異なっていること、また注目している人物も異なったり、ストーリーに対する理解や解釈も区々であったりすることに気付く。そしてこういったグループ活動を通して気付いた様々な点の中で興味深いと思ったことをレポートのテーマとし、最終レポートを提出する。

本発表では、調査対象者2名（JKL①, JKL②：調査同意者、2名とも韓国語を母語とする日本語学習者で学習歴は約3年（自己申告））のミニ作文と、レポートのテーマ及びその内容を分析し、本授業の明示的指導を通じた学習者の気付きについてまとめる。

2. 調査結果および考察

本節では、明示的指導のあと、各文型のミニ作文に見られた調査対象者2名の学習効果について述べた上、レポートのテーマとその内容について考察する。

JKL①は、授業開始前に実施した履修者アンケートに「文法を完璧にしたい」と回答するほど自分の日本語のスキルを向上させたいという気持ちが強い持ち主であった。案の定、JKL①は授業での発言や各該当文型のミニ作文においても文法的な誤用も少なかった。

そして、JKL①は1回目のオリエンテーション作文で韓国語の母語話者が好むとされる客観的把握、つまり漫画の事態の中に臨場して述べるスタンスではなく、作文の冒頭を「この漫画は、～」と始め、終わりは「～で、この漫画は終わる」という事態の外から状況を眺めてストーリーを語るスタンスを取っていた。そこで、フィードバックとして日本語話者が好む主観的把握について明示的に指導を行った。該当漫画は「田中」という人がストーリーの主人公で、田中のついていない一日に関する内容であるが、大半の日本語話者はこのストーリーを述べる際、主人公である田中に注目し、田中に起こった出来事が自分に起こったかのように、事態に臨場してストーリーをまとめる傾向がある。このことを、実際日本語話者が同じ漫画を見て作文したものを見せながら、事態の捉え方に関する差に気付いてもらった。このような明示的指導のあと、JKL①は2, 3, 4回目のミニ作文においてストーリーの人物に注目するようになり、自然に視点の一致が見られるようになった。

興味深いことに、JKL①のレポートのテーマは「主語の選択によって変わる文章表現」であったが、その理由として「日本語と韓国語の文章構造はSOV型で同じであるが、選択する主語が違い、それによって文章表現全体が変わるという点が面白いと思った。」と述べているところである。このことからJKL①は、「視点＝主語」であると大きく捉えていることが窺われた。つまり、主語を誰にするのか、言い換えると、誰の視点からその状況を語るのかによって言語表現、例えば「一てもらう」か「一てくれる」、「能動」か「受動」、「する」か「なる」を選択しなければならないと気付き始めたことがわかった。

期末レポートでは、韓国語と日本語において「主語の有無以外は同じ場合、韓国語での能動態が日本では受動態として現れる場合」の2つのケースについて具体的に述べているが、授業で扱った日本語話者の「見え」について、関連論文を調べ、日本語を学習する外国人の場合、主語を過多使用しているという結果が報告されているとした。そして日本語の主語省略はどのような条件で起こるのか、小説の翻訳を例に挙げながら述べていた。

また、受動表現についても小説の翻訳を対比しながら日本語では受動表現で表すが、韓国語では能動表現に訳されている文に対し、「筆者（JKL①）は日本語の受身表現がもっと文学的で優しい感じで、面白いと思い、韓国語を使う時にもよく使っている」と述べている。最後は、「韓国語と日本語の主語の選択によって異なる文章表現について見てきた。筆者（JKL①）はこのような日本語の言語習慣は、常に自分ではなく別の存在を前面に押し出す文化によるものだと思う。言語に正解はないけど、日本語で話すときは「私」が少し後に下がって、やさしく話をすればいいと思う」と締めくくっている。

JKL①のレポートは、主語の省略と文章表現との関係は、授業で扱った文型表現とは多少異なり、論点がずれている部分はあったが、JKL①なりに資料を調べ、自分が気付いた点を論拠しながら述べている点、そして小説の翻訳の違いが韓国語と日本語の両言語話者の事態の捉え方が異なるためであることに考え始めたことが窺われ、本授業の明示的指導が効果的に働いていた考えられる。

一方、JKL②は、当科目の履修動機として「文法をいろんな観点から学ぶことは初めてだ

から」と回答しており、1 回目のオリエンテーション作文は主人公である「田中」の出来事によく注目し、田中のついていない出来事については迷惑や被害を被ったことを表す受動表現を適切に使えながら述べていた。そして作文の冒頭は、JKL①同様「今日はこの漫画の内容に対して説明します」と始まり、最後は「以上です」と締めくくっていた。そこで、JKL②にも JKL①と同じように日本語話者の作文を見せながら、日本語話者と JKL②との事態の捉え方の差に対して気付きを促した。

しかしながら、JKL②は 2 回目のミニ作文である「授受表現」の産出に関する作文においても「この漫画はみどり君の一日を見せている」と始まり、また時制を全て現在形にするなど、漫画のストーリーに臨場出来ない故、人物の出来事への関わりが全く表れず、1 回目のフィードバックはあまり効果が見られなかったのである。そこで再度日本語話者が好む事態の捉え方についてフィードバックを行い、文法的に正しい日本語の作文より、自然な日本語の作文について考えてもらった。その後 JKL②は、次の「受動表現」の産出に関するミニ作文からはストーリーの主人公を意識し、誰の観点から述べていったらいいのかについて考え始めたことが窺われ、自然と視点の統一が取れるようになった。

JKL②のレポートのテーマは「文化による韓国語と日本語の使い方」と、日本語の自動詞とナル表現に注目していた。期末レポートでは、「日本語を自然に話すためには自動詞と他動詞の使い分けをよく把握することが大事だと思う。それで、このレポートでは「文化と配慮によって自動詞の使用選択は日本語と韓国語でどう違うか」という問いに答えを探したい」と動機を述べていた。そして論文を根拠に日本語と韓国語の自他動詞の使用頻度について述べ、日本語話者の自動詞の使用について「自己主張しようとせず他人を思いやり、支えようとする。他動詞を使うと相手に心理的な負担をかけることになるかもしれない」としている。それに対して「韓国では面白いことに「相手の思いやり」に対する含意と関係なく二つの表現を両方とも使う。韓国語は自動詞と他動詞を用いる際、思いやりの表現としては中立の立場をとるということになるのである」と、言語話者の文化とその言語表現の関連性について考え始めていることが窺われた。

なお、「ナル表現」についても「両国ともこの表現を用いることで話者の意志的行為を含まないものである。それで、相手に礼儀をわきまえたり、尊敬の意味を表わしたりできる。このように似ている部分もあるが、韓国語はたまに自動詞を使用すると不自然になる時がある」とし、コンビニなどでよく耳にする「お釣りは 500 円になります」という表現を例に挙げていた。この例に対して韓国語では「ナル」を使うことで客に対する丁寧さは表れないとし、韓国語は「主語の行為をはっきり示す「スル表現」を好む場合も多い」と述べている。最後に JKL②は、韓国語の自動詞やナル表現は、相手に対する配慮としての機能は持たないことが両言語における最も大きい差であるとし、今後の課題として、サービス業以外で日本語話者が「ナル表現」をどのように使っているのか、そして「スル」を使っても思いやりを表せるのかについて調べたいと述べていた。

JKL②のレポートは、外国人日本語学習者にとって運用が難しいとされる日本語話者の自動詞とナル表現の使用について適切な資料を調べ、かつ自分の意見をまとめながらよくまとめていた。池上・守屋編（2009）は、日本語話者はどんな結果が存在しているかに注目し、そこに至る因果関係、主体の意志や具体的行為などに言及しないナル表現を好む傾向

があるとしているが、この概念は日本語という言語のことより、日本の文化と密接な関係があるため、実際ナル表現を日本語学習者が適切に運用することはそう安易ではない。また、ナル表現は上述したコンビニの例のように日常生活でよく使われている表現であるため、その誤用が際立つ。このことから、JKL②のように、日本語学習者が日本語という言語の文法に注目するだけでなく、その言語を発話する言語話者に注目し始め、またその言語話者の背景にある文化についても考え始めるということは、本授業の根本的な目的であり、かつ日本語話者の事態の捉え方を明示的に指導する必要があることを示唆するものであると考える。

3. おわりに

本発表では、日本語話者の事態の捉え方を明示的に指導した場合の学習効果について、韓国語を母語とする日本語学習者2名が作成したミニ作文やレポートを分析して考察を行った。

その結果、両調査対象者ともに文化と言語の関連性を意識し始め、これまでの自分の日本語の発言について振り返ってみる気付きが見られた。そして、言語学習というものを文法の学習という枠から、目標言語の文化や目標言語の言語話者の事態の捉え方に興味を持つようになり、それが作文などにも反映されるようになったと考える。

このような気付きは、本授業の目的である、日本語の文法を構造的なものだけでなく、一つの言語表現として理解してもらいたいという望みと合致するところがあり、その明示的指導の効果が見られたと考える。今後もこういう明示的指導を重ねていき、ますます「使える日本語」にしてもらいたい。

<主な参考文献>

池上嘉彦（2006）『英語の感覚・日本語の感覚<ことばの意味>のしくみ』NHK ブックス
池上嘉彦・守屋三千代編（2009）『自然な日本語を教えるために 認知言語学をふまえて』
ひつじ書房

公益社団法人日本語教育学会

支部活動委員会

委員長：橋本直幸

副委員長：國澤里美・嶋ちはる・永井涼子

委員：新城直樹・井上里鶴・内田さつき

御館久里恵・雁野恵・菊池哲佳

木下謙朗・島崎薫・世良時子

高橋志野・田川恭識・中河和子

中東靖恵・平田未季・深川美帆

松尾憲暁・元木佳江・山路奈保子

山本裕子・ルチラ パリハワダナ

審査・運営協力員

浅津嘉之・黒田史彦・嶋津百代

中島祥子・登里民子・橋本ゆかり

由井紀久子・吉川達・吉野文

公益社団法人日本語教育学会

2022 年度第 2 回支部集会【北海道支部】予稿集

発 行 2022 年 6 月 7 日

発行者 公益社団法人日本語教育学会

〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-4-1 東方学会 2F

TEL 03-3262-4291 FAX 03-5216-7552 E-mail office@nkg.or.jp

URL <http://www.nkg.or.jp>